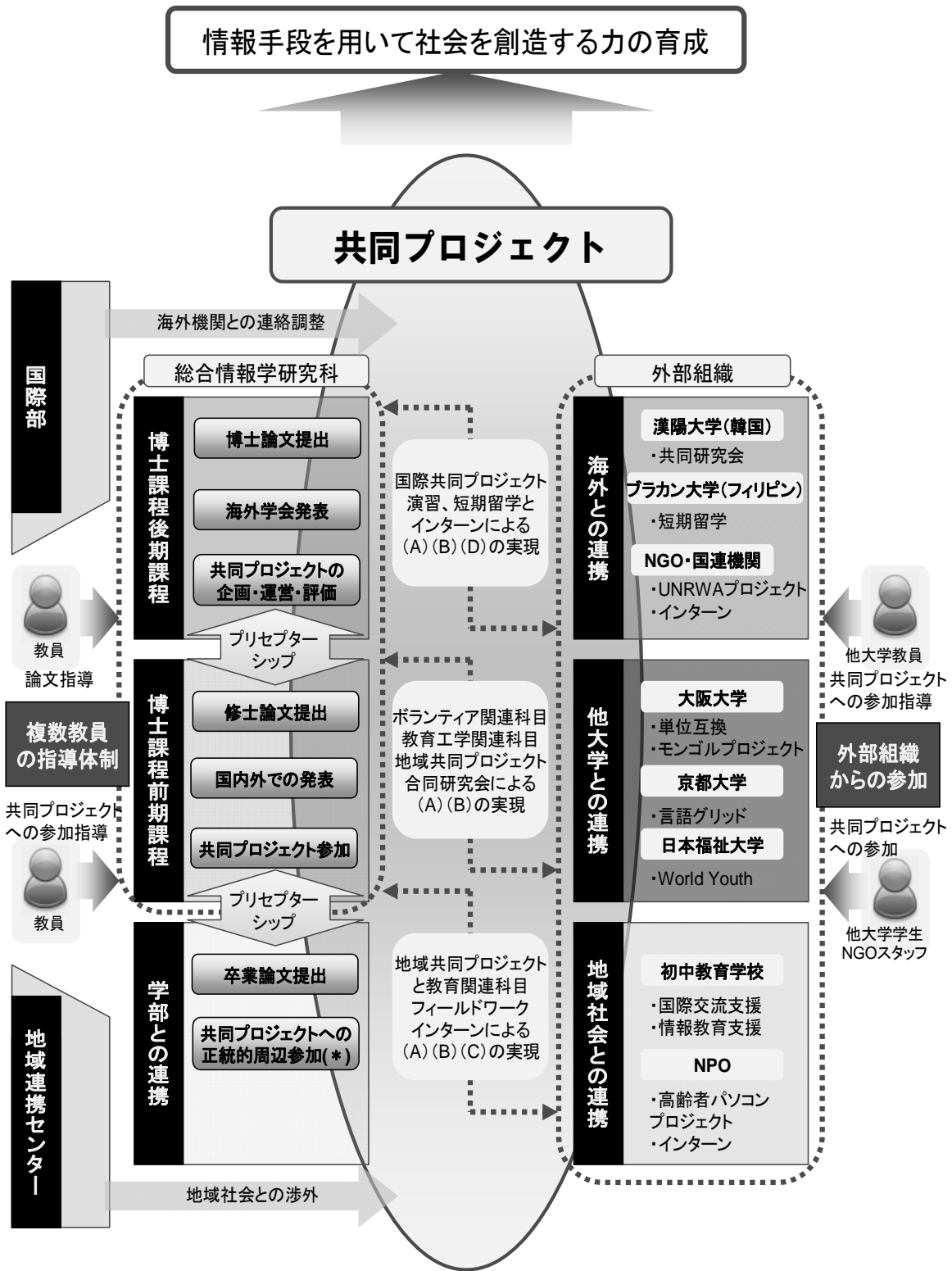


教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	関西大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	参加連携型の大学院教育による社会創造 (共同プロジェクトによる「考動力」の育成)		
主たる研究科・専攻名	総合情報学研究科社会情報学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 久保田 賢一		
<p>[教育プログラムの概要]</p> <p>関西大学は長期ビジョンにおいて「考動力」あふれる人材の育成をめざすとしている。「考動力」とは、深い思慮に依拠しつつ、物事に果敢に挑戦し、行動できる力を指す。「総合情報学研究科社会情報学専攻」は、それを「<u>情報手段を用いて社会を創造する力</u>」、すなわち「<u>情報社会に関する多様な知識と高度な情報リテラシーを背景に、現実社会のさまざまな組織と連携しながら問題の解決に挑む力</u>」にとらえる。そして、多様な専門領域の教員が指導できる環境を生かして、そのような人材の育成を実現するための教育プログラムを構築する。</p> <p>例えば、地域には早期から情報環境に子どもを触れさせ、情報の収集・活用・発信の力を付けたいと考える学校がある。しかし知識や技術が不足しており、自力ではそのためのカリキュラム開発ができない、情報セキュリティを確立できない等の問題を抱えている場合が多い。そうした問題については学生が学校現場の教師と共同しつつ、カリキュラム開発やセキュリティシステムの構築を行うことが期待される。また、開発途上国には、ネットワークを敷設できないことから社会的・経済的にも情報社会から隔離され、デジタルデバイドに悩む地域が少なくない。そういった地域に対しては、学生がコミュニティの責任者と共同しつつ、簡易無線 LAN を敷設し中古コンピュータを再利用して情報学習センターを立ち上げる等が期待される。</p> <p>このように具体的に地域や社会と連携して実践的・探究的に学び、問題解決に挑む機会を提供する一方で、現場で生かせる基礎力を培うため、科目の新設と科目内容の更新を行う。</p> <p>本専攻では、学部や他大学、その他国内外の組織と連携して、国際社会や学校現場と直接関わる研究活動をこれまでも行ってきたが、その連携は大学として体系化されたものではなく、個々の教員の持つつながりに依存していた。しかし、上記を実現するには、これを正式な履修課程に組み込み、そこで学んだことを正当に評価する仕組みが必要である。関西大学では、「<u>地域連携センター</u>」や「<u>国際部</u> (本年 10 月設置予定)」を設置し、組織的に多様な連携を支援する体制を整えつつある。本専攻でも、体系的なカリキュラムを実現し、実践的・探究的な研究を進めるために、この計画を土台に学内外との連携を強化し、参加型のダイナミックな学習機会を提供することをめざす。</p> <p>■本教育プログラムの目標 本専攻でめざす「<u>情報手段を用いて社会を創造する力</u>」は、次の 4 つの構成要素に分けることができ、本教育プログラムではこれらの目標を達成することをめざす。</p> <p>A) 地域や国際社会と連携を形成する力 B) プロジェクトの立案・企画・運用・評価を行える調整力 C) 情報手段を用いて情報を収集・分析しソリューションを提案する ICT コーディネーション力 D) 国際社会において論理的にコミュニケーションをとる力</p> <p>■国内外の組織との連携をめざした方策 国内外組織との連携について、次の 4 つを実現する。</p> <p>(1) 学部との連携：学部と大学院を一体と考え、「共同プロジェクト」に参加させることによって、学部から博士後期課程までの連続的な教育を行う。</p> <p>(2) 他大学との連携：大阪大学、京都大学、日本福祉大学などとの連携を強化・制度化し、本学だけでは提供できない多様な経験や専門知識をもつ教員から学ぶ環境を整える。</p> <p>(3) 地域社会との連携：学校現場や NGO/NPO などと連携し、現実の問題に直面させ、その解決に協同して挑む中で問題そのものを深く学び、解決に必要なコーディネーションの力を培う。</p> <p>(4) 海外との連携：韓国・漢陽大学、フィリピン・ブラカン大学などとの連携を強化・制度化して、確実に社会の多様な問題と対峙する環境をつくり、その中で具体的な解決策を見いだすコーディネーション力を培う。</p> <p>■評価・指導体制の充実 カリキュラムを体系的に構成し効率的に指導するために、ID (インストラクショナル・デザイン：教授設計) に基づいた目標管理を行う一方で、e ポートフォリオ評価を導入する。ID によって、4 つの目標に対して具体的な下位目標を設定し、それをチェックポイントと対応させてスモールステップで目標の遂行をめざさせる。また、そこに至る過程を e ポートフォリオに記録させ、自律的な学習を促すと同時に、きめ細かい指導に活かす。</p>			

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）



(*) 正統的周辺参加とは、状況的学習論における学習プロセスの概念であり、周辺の役割を担う学部生が、中心的な役割を担う学生へと次第に役割を変化させていくプロセスをさす。

- (A) 連携形成力
- (B) プロジェクト調整力
- (C) ICTコーディネーション力
- (D) グローバルコミュニケーション力

<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、ファカルティ・ディベロップメントや情報提供の実施体制が整えられている点は評価できる。

教育プログラムについては、「情報社会に関する多様な知識と高度な情報リテラシーを背景に、現実社会のさまざまな組織と連携しながら問題の解決に挑む力」を高めるという目標に沿って、昨年度の申請から改善が図られており、大学院生の学際化、国際化を目指すため、学部、他大学、地域社会及び海外の教育資源活用を図り、「共同プロジェクト」を中心とした教育方法の改善とeポートフォリオを主軸に据えた過程管理などが計画されている点は高く評価できる。また、大学全体としての支援体制が明示されており、本教育プログラムの実現性が期待される。ただし、課題研究及び共同プロジェクトの具体的な実施プロセスについては、大学院生の希望をどのように反映させるのかという点も含め、明確化が求められる。